

第40回学校給食作文コンクール
& 給食に関する標語

入賞作品集



令和6年10月

苫小牧市学校給食会



「生きた教材」として欠かせない学校給食の審査を終えて

第四十回学校給食作文コンクール審査委員長

苫小牧市立ウトナイ小学校長 手塚 敏

第四十回を迎えたことを記念し、今年度は伝統ある給食作文コンクールに加え、給食（食育）に関する標語も募集しました。その結果、作文部門では六十九点、標語部門では四百九十一一点もの作品が寄せられました。どの作品も子どもたちの給食（食育）への思いがあふれた素晴らしいものでした。多くの児童生徒が興味関心をもって取り組んでくれたことに感謝します。そして、入賞された皆さん、本当におめでとうございます。

発達段階に応じて、小学校一年生から中学校三年生まで、給食が好きな気持ち、健全な食生活、地元食材への思いや給食に関わる人々への感謝の気持ち、食に関する知識理解、食文化、食育と環境保全の関りなどが、子どもらしい視点で表現されていました。審査しながら、ほっこりした気持ちになりました。どうもありがとうございます。特に今年度開催された「給食（食育）」に関する標語部門では、思いもつかない語句の使い方に感心させられました。

「食」は命の源です。学校教育では、「知」・「徳」・「体」の資質能力をバランスよく育成していきませんが、その土台となるのは「食」ではないでしょうか。生涯を通じた心身の健康を支えるために学校給食の果たす役割は大きく、地域の伝統的な食文化や食に関わる人々への感謝、食料の生産・流通・消費などを学んでいます。学校給食は「生きた教材」なのです。さらに今回の作文コンクールでは、学びを自ら主体的に進め、食品ロス、地球規模の気候変動等々、SDGsの視点から総合的に考えている作品もありました。各学校におかれましては、よりよい生活を送るため、より豊かな生活を送るため、この文集を活用して一層の「食育」の推進に励んでいただきたいと思います。

本市のホームページには、学校給食の人気メニューのレシピが掲載されています。忙しい毎日とは思いますが、ぜひ、ご家族で給食のメニューを一緒につくり、共食され、会話を花を咲かせてほしいと思います。子どもたちにとってはおなじみの、保護者にとっては懐かしの「味」が、つくること・食べることの楽しみにつながるはずです。

結びになりますが、家庭、学校、地域と多様な関係者の連携・協働により、持続可能な「食」を支える食育が推進されますことを祈念申し上げ、巻頭言とさせていただきます。

☆第四十回学校給食作文コンクール 入賞者

【最優秀賞】

小学生の部

一学年の部

拓進小学校

一年三組

福田

栞菜「はじめてしったきゅうしよくのこと」

二年生の部

ウトナイ小学校

二年二組

本田

陽咲「わたしのわくわく」

三年生の部

沼ノ端小学校

三年一組

村田

慧人「フルーツポンチの力」

四年生の部

拓勇小学校

四年四組

京極

莉空「給食のメニューを探る」

五年生の部

緑 小学校

五年三組

村上めぐみ

「最高の献立」

六年生の部

ウトナイ小学校

六年五組

関

姫花「届け、ありがとうの気持ち」

中学生の部

一学年の部

明野中学校

一年一組

三浦

鈴「好き嫌いく感謝の気持ち」

二年生の部

明野中学校

二年一組

児玉

凜生「僕たちを支える給食」

三年生の部

啓明中学校

三年二組

近藤

芦羽「心から感謝を込めて」

【優秀賞】

小学生の部

一学年の部

ウトナイ小学校

一年四組

本田

乙叶「パンのひ さいこう」

二年生の部

大成小学校

二年二組

草木

暖那「えいようパワーで元気いっぱい」

三年生の部

緑 小学校

三年一組

小川咲良子「きゅう食とわたし」

四年生の部

大成小学校

四年一組

奥谷

梨夏「給食は感しやして食べよう」

五年生の部

大成小学校

五年二組

草木

梨里那「SDGSへ向けて」

六年生の部

拓勇小学校

六年一組

京極

大空「六年間の感謝を込めて」

中学生の部

一学年の部

青翔中学校

一年一組

荒井

彰佑「給食で広がる食文化の知識」

二年生の部

明野中学校

二年一組

名和

美咲「給食の大切さ」

三年生の部

青翔中学校

三年五組

谷村

光璃「食品ロスを減らすために」

応募点数

小学生 17 点

中学生 52 点

合計 69 点

☆給食に関する標語 入賞者

小学生の部

中学生の部

拓勇小学校

一年一組

藤原

叶多

沼ノ端中学校 一年一組

星

莉花

ウトナイ小学校

二年二組

本田

陽咲

啓明中学校 三年二組

近藤

芦羽

ウトナイ小学校

三年一組

小松

幸羽

沼ノ端中学校 三年二組

千葉

大志

ウトナイ小学校

四年五組

藤澤

花

ウトナイ小学校

五年四組

山村

栞

拓勇小学校

六年一組

京極

大空

応募点数

小学生 463 点

中学生 28 点

合計 491 点

目 次

〔学校給食作文〕

《小学生の部 最優秀賞》

一学年の部	題名「はじめてしたきゅうしよくのこと」	……4
	拓進小学校 一年三組 福田 栞菜	
二年生の部	題名「わたしのわくわく」	……4
	ウトナイ小学校 二年二組 本田 陽咲	
三年生の部	題名「フルーツポンチの力」	……5
	沼ノ端小学校 三年一組 村田 慧人	
四年生の部	題名「給食のメニューを探る」	……6
	拓勇小学校 四年四組 京極 莉空	
五年生の部	題名「最高の献立」	……7
	緑 小学校 五年三組 村上 めぐみ	
六年生の部	題名「届け、ありがとうの気持ち」	……8
	ウトナイ小学校 六年五組 関 姫花	

《中学生の部 最優秀賞》

一学年の部	題名「好き嫌い＜感謝の気持ち＞」	……9
	明野中学校 一年一組 三浦 鈴	
二年生の部	題名「僕たちを支える給食」	……10
	明野中学校 二年一組 児玉 凜生	
三年生の部	題名「心から感謝を込めて」	……11
	啓明中学校 三年二組 近藤 芦羽	

〔給食に関する標語〕

小学校の部・中学校部 入選作品	……12
-----------------	------



小学生の部 最優秀賞

《一学年の部》

拓進小学校 一年三組 福田 葉菜

「はじめてしった きゅうしよくのこと」

わたしのおばあちゃんは、ほいくえんできゅうしよくを かんがえたり つくったりしています。きゅうしよくができるまでって いろんなことをしているのかなとおもい、インタビューをしてみました。

たべられるようになるまでには、えいようのことをかんがえて こんだてをきめたり、ざいりようを たのんだりしていることをしました。しよくちゅうどくをよぼうするため りようりのおんどをはかっているときき、おどろきました。つくるばしよは、あつくてたいへんで、からだにいいものをつくっているから、のこるとかなしいとききました。

わたしは、きゅうしよくを のこしてしまうこともあります。いつも、のこしてごめんなさいとおもいました。

これからは、つくってくれてありがとうございますと かんしやしな

がら、なるべくのこさないようにしたいとおもいます。

《二学年の部》 ウトナイ小学校 二年二組 本田 陽咲

「わたしのわくわく」

「まい日見るものは何だろう。」
と考えたとき、わたしはきゅう食のこんだてだと思いました。どうしてかというと、わくわくするからです。

きゅう食のこんだてには、いろいろなことが書いてあります。聞いたことのないりようりや、おいしそうなデザートや、わたしのすこしだけにがてなやさいです。

わたしは、やさいがすこしだけにがてです。

ようちえんから、学校になったとき すこしだけふあんでした。でも、さいしよにきゅう食を食べたとき、びっくりしました。とつてもとつても、びっくりしました。にがてだと思っていたやさいが、すぐくおいしかったからです。

だから、わたしは、まい日きゅう食のこんだてを見て、きゅう食をたのしみにして、はりきって学校へ行きます。



《三学年の部》 沼ノ端小学校 三年一組 村田 慧人

「フルーツポンチの力」

ぼくは、きゅう食のメニューの中でデザートが一番好きです。さらに、デザートの中でもフルーツポンチが一番好きです。お母さんが家でも作ってくれるけれど、学校で出るフルーツポンチは、家とはちよつとちがうとくべつな感じがします。

クラスの人々と一しよにあまいフルーツポンチを食べていると、ぼくもみんなもとでも楽しくてうれしい顔になっているからです。フルーツポンチのおかわりは人気なので、じゃんけんでかったら、おかわりができます。かった時に「いえーい。」と大きな声を出しながらガッツ



ポーズをする友だちがいるけれど、ぼくははばかりしいので、心の中でガッツポーズをします。

フルーツポンチに何が入っているかしていますか。一つのデザートなのに、みかんやナタデココ、パイナップルなどたくさんのフルーツが入っているんです。さらに、白玉が入っているときは、大当たりです。白玉は口に入れると、さいしよにツルツとし

て、かんだらモチモチして、そのしよっかんがぼくは大好きです。あまずつぱいフルーツを食べた後に白玉を食べると、フルーツと味もしよっかんもちがうので、口の中がリセットされます。白玉をかみながらずっと口の中にいれたら、ちよつとあまい感じがして、白玉の味がだんだんわかってきます。そのままずっと口の中でゆつくりモグモグかんでいたのに、いつの間にか白玉はなくなつてしまひざんねんな気持ちになつて、もつと食べたくなります。まん足できるまで、白玉をいっぱい食べたいです。

ぼくのフルーツポンチの食べ方は、一番好きじゃないパイナップルをさいしよに食べます。それから、その時に一番食べたいものは何だろうと考えて、えらばれたものをさいごまでのこします。なぜかというと、最後に好きなものを体中で「おいしー。」と感じたいからです。フルーツポンチのしるは、いろんなフルーツの味がまざつて新しい味になっています。一つのフルーツだけでは出せないふしぎな味です。のこつたしるは、いっきにのみます。そうすると、あまくておいしい味できゅう食をしめくる事ができるのです。オススメです。なので、きゅう食が楽しみで学校にもつと行きたくなると思います。いやなことがあつても、フルーツポンチがあるのならがんばれそうなので、きゅう食にフルーツポンチをふやしてほしいです。

《四学年の部》

拓勇小学校 四年四組 京極 莉空

「給食のメニューを探る」

四時間目になるとおなが「ぐうつ」となる。あともう少しで給食だ。自分にそう言い聞かせながら、がんばっている。給食は「回ふくのエネルギーになるのだ。毎日ちがうメニュー、知らないメニュー、料理が大好きな私にとって、こん立や材料も興味しんしんだ。

一番気になったのは、「開拓井」。開拓ってどういう意味だろう。国語辞典で知らべてみた。そこには、「山を切り開いて、田や畑を作ること」と、書いてある。「開拓井と全然関係ないじゃん。」と思った。そこで、開拓井を調べなおしてみると、「みその香りとぶた肉と大豆を北海道の大地に見立てて、北海道で有名なとうもろこしを使って、北海道の開拓時代を表現している」と書いてある。「すごい。」なるほど、だから開拓なんだと思った。もととは、栄養士さんが考えたメニューで北海道では色々な町の給食で出されているメニューなのだそう。それにしても、北海道をイメージして考えられるなんてさすがだと思った。

調べ続けてみると、開拓井は北海道の給食メニューとしてあちこちで紹介されていた。それを毎回ただけるなんて幸せだ。ネットではレシピもたくさん公開されていて、ついに「苦小牧の開拓井レシピ」を発見した。私のクラスでも人気の開拓井、おかわりの人が多く、すぐになくなってしまふ。それを家で作れるなんて。そう思つて母と苦小牧の開拓井を作つてみた。おいしさの中

に、しょうがやんにくもかくれているとは。もう大満足。給食の味とはちよつと違つたけれど、おいしい開拓井が出来た。そして、私の料理ノートにレシピをはつた。「こんなおいしいメニューを、栄養士さんありがとうございます。」

もう一つ気になっているのは、「クイッテイオスープ」だ。給食に出た時、平らなうどんなのかな、と思つたが、クイッテイオとは、主にタイなどで食べられているお米から作つためんなんだそう。ツルツルのようなモチモチのような不思議な食感のめん。それが、スープと混ざり合つて、最高においしい。スーパ―ではなかなか見かけないめんだけれど、給食で他の国の料理が食べられるのは、とつてもうれしい。知らないメニューを知れるのも給食のおかげだ。

毎日毎日一年間もこん立を考えるのは大変だと思ふ。栄養たつぷりの給食を作つてくれて本当にありがとうございます。そういう栄養士さんの苦勞や、給食センターで働いているたくさんの人たち、給食の先生、配ぜん員さん、そして、学校に給食を届けてくれる人たちのがんばりや協力のおかげで給食はとつてもおいしく、楽しく、元気になる。

私は、この夏にきらいだと思つていたなすびが、食べられるようになった。一口食べたらず外ににおいしかったのだ。きらいだなと思つていても、實際食べてみるのが大事。私もみんなも一口チャレンジで残食をへらしたい。

大すきな給食、愛情一杯の給食、次はどんな国のメニューが出るのか楽しみだな。



《五学年の部》

緑小学校 五年三組 村上 めぐみ

「最高の献立」

わたしは、『給食が教えてくれたこと』という本を読みました。この本を選んだ理由は、給食が大好きなので、題名を見て読んでみたいと思ったことと、表紙に書いてある「最高の献立」というところに興味を持ったからです。

この本を書いた松丸奨さんは、小さい頃から好ききらいがはげしく、小学校に入学しても給食が苦手でしたが、栄養士さんと出会ってそれをこく服し、自分も栄養士になりたいと思うようになります。男性ではむずかしいと言われる学校栄養士ですが、たくさん努力をして夢をかなえるまでと、その後の活やくが書かれているお話です。



わたしがこの本を読んで強く心に残ったところは、フリーピンのひんこん地いきスモーキーマウンテンにある「パグパグ」の屋台について書いてあるところです。かわいい名前ですが、ドロドロになった古い油を何度も使い回して生ごみをあげ直したものだとして、本来ならばはいきされるものを食べることに、とてもおどろきました。そんな地いきに食育授業に行った松丸さんの話を聞いて、少しでも安心安全で栄養のあるおいしい食事がで

きるようになったらいいなと思いました。

また、松丸さんが苦手な給食をこく服したお話も心に残っています。「一口だけでも食べてみて。きつといいことが起こるよ。」と栄養士さんに言われて、がまんして一口二口と食べたなら、ずっとできなかった逆上がりができたり、テストでいい点数をとったり、身体測定では背が伸びていて、かぜもひかなくなったそうです。たまたまかもしれないけれど、いいことを見つけて給食も食べられるようになるなんて、いいお話だと思いました。わたしは、給食は大好きですが苦手なものもたくさんあります。がんばって一口食べますが、なかなかこく服できません。だから、松丸さんはすごいと思いました。わたしも、無理をしないで見習いたいです。また、苦い味やすっぱい味をいやがるようにできている舌も、何回も食べているとおいしく感じるようになるそうです。わたしは、小さいころすっぱいものが苦手でしたが、今では大好きなので、なるほどと思いました。

この本を読んで、日本の給食は世界一と言われるほどすぐれているということがわかり、もっと給食が好きになりました。これからは、栄養士さんや調理してくれる人、運んでくれる人達に感謝して、少しずつでも苦手をこく服していききたいです。

この本は、写真やクイズやレシビなど、楽しいページがたくさんあります。給食が苦手な人も好きな人も、みんなに読んでもらいたいです。

《六学年の部》

ウトナイ小学校 六年五組 関 姫花

「届け、ありがとうの気持ち」

「いただきます。」

にぎやかだった給食の時間もコロナ禍では机を寄せることもなく、黙食が当たり前になってしまい、その時間は味気ないものと化した。どこからともなく、いい香りが漂う。今日はナンカレーだ。異国の料理を日本にいながらにして食べられることがうれしい。しかも、レストランではなく、給食でだからだ。世界では、地域によって料理の仕方がこんなに違うのかと気づく。

社会の授業でSDGsについて学んだ。世界には飢えに苦しみ、命を落とす人が他人ごとではくらい存在する。彼らは十分な栄養を摂ることさえできず、支援物資にがい骨の行列が並んでいるほど深刻だ。私が暮らす日本では当たり前のように給食が準備され、健康に育つために多くの人が携わってくれている。限られた予算から献立を考えてくれる方、作業効率を考え調理してくれる方、安全運転で学校まで届けてくれる方など、メニューからは見えないう裏側で私たちのために力を惜しみなく注いでくれていることに感謝せずにはいられない。しかし、その一方で食べられるのに

捨てられている現状も知った。時間が足りないから食べきれない、嫌いなものが入っているから食べない、量が多いから残すなど、様々な理由があげられる。しかし、食とは自然の恩恵で成り立っている。言い訳をして残したことを正当化してしまっていないだろうか。お皿に残ったその一口。日本人のもったいない精神を、呼び覚ますことはできないだろうか。食べ終えた後もまだこの給食は終わってはいない。私の住む苫小牧市では、給食の食べ残しを燃料にしてバイオガス発電が行われている。発電の際にできる副産物も堆肥として利用され、エコな活動を行っていることも、地球にとって大切な取り組みの一つだ。

この学習を通して思ったことは、世界に足りていないのは、食べ物ではなく、一人一人の行動だ。実生活への行動を意識的に変えていくことが必要とされる。自分たちの環境が豊かであることに気づいた今、もつと視野を広げ、できることは何かについて考えていこうという気持ちが芽生えた。平和で恵まれた日本にいる私たちは、安全にいただける給食に感謝し、「残さず食べたよ。」ということを形として表したい。

だから、今日も私は給食を残さず食べる。



中学生の部 最優秀賞

《一学年の部》 明野中学校 一年一組 三浦 鈴

「好き嫌いく感謝の気持ち」

私は好き嫌が多く、給食を全部食べたことがほとんどない。「残さず食べよう」「苦手でも一口は食べてみよう」というのはわかっていても、初めて見るものや嫌いなものは、一口も食べないこともある。小学生のころからずっとだ。時間も短いし、残したって誰にも叱られないからいいやと思っていた。しかし、あることをきっかけに考えが少し変わった。

今年の一月、苫小牧市の「こども国際ツアー」に参加し、札幌のJICAでウガンダの学校給食を食べた。メニューは、とうもろこしの粉をゆでて丸めた「ポショ」という主食と、「豆のトマト煮」だった。味はおいしかったが、「え、これだけ？副菜やデザートはないの？」「毎日こんなメニューかな・・・」と思った。私たちの給食とは全然違っていた。そして私は、世界の学校給食についてもっと知りたいと思った。

夏休みにもう一度JICAに行つて、世界の子供たちの食糧事情や学校給食について調べてみた。すると、開発途上国の中にはもともと学校給食がない国や、一日の食事が給食の一食だけとい

う国があることがわかった。朝から家の仕事を手伝い、空腹のまま学校へ行つて勉強している子供たちがいるなんて思つてもみなかった。毎日残している自分が恥ずかしくなった。

また、この問題については、世界の取り組みとして四十五年前から途上国の学校に給食を配る「学校給食プログラム」という活動があることも知った。貧困に苦しむ国の子供たちが、給食を食べられることによって栄養状態が改善したり、家庭の食費がかからなくなった。すると、親が学校に通わせてくれるようになり、また給食が食べられるという良い循環が生まれるそう。しかし、四十五年も活動が続けているという事は、まだまだ解決していないという事だと思ふ。

では、日本の給食はどうだろう。始まりは明治二十三年、貧困児童を対象に無料で学校給食を実施したそう。メニューは、おにぎりや焼き魚に漬物と、今の給食とは全然違うが百年以上前から給食があつたことに驚いた。

今、私たちの給食は栄養バランスが良いだけでなく、地域の特産品を使った料理や海外の料理などもあつて、毎日違うメニューで食事を楽しむことができる。



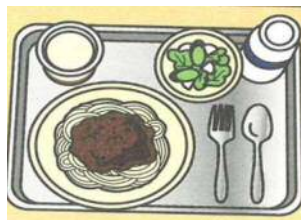
おにぎり しお 漬物

これは、当たり前ではないのだ。今の私は、途上国の子供たちの力になることは難しいが、毎日の給食に感謝して食べることはできる。何のために給食があるのか、そこにどれだけの人が携わってくれているのかを忘れずに、少しずつ苦手を克服していきたい。

「僕たちを支える給食」

当たり前かもしれないが、僕にとって給食とは僕の体を作ってくれる大事なものであり、マイライフの中の一つの楽しみである。

僕は給食が大好きだ。ただ、全部が全部好きなわけではない。例えば、「トマトスパゲッティ」というものは、結構苦手だ。トマトをぐちよぐちよにしたような感触。すすったら飛び散り、インクのように服を染める真っ赤なソース。これが出てきたときは正直モチベーションが下がる。もちろん嫌いな



ものだけでなく、好きな給食もたくさんある。まれに出てくるたれがたっぷりかかった「てりやきチキン」。これは、僕の今まで食べてきた中でおいしいものランキングトップ10に入る。それくらい好きだ。ただし、言いたいことがある。主食がパンの時に限って、肉とか白ご飯に合うものが出てくる。そのたび僕はこう思う。この肉は、白ご飯と一緒に食べたとき、どのような化学変化が起きるのだろうか。だから、ぼくのてりやきチキンをどうか、白ご飯と一緒に出してくださいと、願うばかりだ。

このくらい、僕は給食に対して愛が強い。しかし、近年では、

第一次産業の生産者がかなり減ってきているらしい。今では、少子高齢化が進んでいて、人手が足りないため、後継者がいなかったり、貿易の自由化が進み、海外から輸入したものを購入したほうが安く、海外産を購入する人が多かったりというのが問題だ。

僕が愛しているのは、日本の食だ。そこで、どうしたら生産者が増えるかを考えた。そこで、僕の一つの意見だが、小学校や中学校にもっと農業の楽しさを知ってもらうために、見学学習や体験学習などを増やすと思った僕は、七月の初めのほうに宿泊研修に行き、そこでクボタアグリフロントというところにお邪魔した。僕たちは、農業を行っている農家さんの気持ちになって考え、判断することを一つのゲームを通して行った。第一に、すぐくおもしろかったというのがあるが、農業にすぐ興味を持った一つのものを育てるのに、いろんな判断をして経済を回すというのはものすごく楽しかった。だから、このようなことをもっと増やせば、生産者も増えていくのではないかと考えた。

このように、僕が愛している日本の学校の給食は、いろんな経過を経て、僕たちの体を支えるものとなる。僕たち小学生・中学生は、この給食のおかげで成り立っている。だから、作りに敬意や感謝の気持ちを忘れずに給食に向かおうと思う。給食センターの皆さんありがとうございます。そして、これからもよろしくお願いします。

《三学年の部》

啓明中学校 三年二組 近藤 芦羽

「心から感謝を込めて」

「はあ。」僕は、大きなため息をついた。八月の給食献立表を見ると、たった四回しか給食を食べることができないことに気がついたからだ。僕は、小学校一年生から中学校三年生の現在まで一度も学校を欠席せず、遅刻や早退もしていない。それは、元気の源、給食の力が大きいからである。学校へ行く前に、必ず献立表を確認し、今日も一日頑張ろうと、自分を奮い立たせ登校し、給食配膳室からほのかに香るおいしそうなおいかけば、授業により集中して取り組める。僕にとって給食時間は、至福の一時である。クラス全員で同じ物を楽しくお話ししながらおいしい給食を食べる時間、それも残り百回程度となってしまった。だから、一食一食を味わい、胸に刻みながら給食の味をかみしめ、堪能したいと思う。

一学期が終わり、母は早速、頭をかかえていた。なぜなら、今年から夏休みが長くなり、僕の昼食作りの回数が増えるからだ。ここ数年、食品など値上げが止まらない。あらためて低価格でありながら栄養バランスを考え、おいしい給食を提供してくれる学校給食には感謝でしかない。なんて幸せなことなんだろう。母は、夏休みも給食があれば・・・とさえ、なげいている。給食は、母にとっても大変ありがたい存在なんだと悟った。そんな母に少しでも手助けになればと夏休み中、家庭科の教科書にある全五十二

種類のレシピを給食の代わりに作ることに挑戦した。料理は、僕にとつて、超がつくほど初心者だけど、手こずりながらも全制覇をした。今までは、出された母の手料理を何も考えずに食べていたが、作る側の苦労が初めて理解できた。たかが三人前を作るのでも大変だと感じたのに、大量の給食を毎日作っていることを考えると、今後、より給食を残さず大切に食べたいと思い、感謝の気持ちで胸がいっぱいになった。

僕が給食センターの人々に直接感謝の気持ちを伝えられる機会は、この作文コンクールしかないと考え、小学校一年生から毎年書き続けています。

中学三年生となり、これが最後の感謝を伝える場となりました。思い返せば、給食を楽しみに入学した小学校。低学年では、食べるのが遅く無我夢

中ではおぼり、中学年では、胆振東部地震で牛乳が欠品したり、コロナ禍で黙食になってしまったりした事がありました。現在、どれも思い出となりました。

高校生になったら、もう給食が食べられなくなると、さびしい気持ちでいっぱいです。九年間、栄養たっぷり、地産地消食材を使ったり、珍しい献立を考えて下さったり、子ども達が喜びそうな給食を作っていただき、本当にありがとうございます。食材の生産者や配送してくださる方、調理してくれるセンターの方々、学校で給食の準備をしてくれる配膳員、その他、給食に携わる仕事をされている方に感謝して給食をおいしくいただきます。



「給食に関する標語」 優秀作品

【小学校の部】

拓勇小学校 一年一組 藤原 叶多

「ホッキカレー めちやくちやおいしい うみのさち」

ウトナイ小学校 二年二組 本田 陽咲

「きゅうしよくは みんなのえがお かけはしに」

ウトナイ小学校 三年一組 小松 幸羽

「そのひと口 みんなの思い つまってる」



ウトナイ小学校 四年五組 藤澤 花

「時間わり 見るより先に こん立て表」

「残さない 感謝をこめて フードロス」

ウトナイ小学校 五年四組 山村 栞

拓勇小学校 六年一組 京極 大空

「おいしいぞ 地元の味だ ホッキカレー」

【中学校の部】

沼ノ端中学校 一年一組 星 莉花

「栄養は 赤、黄、緑で 満点だ」

啓明中学校 三年二組 近藤 芦羽

「給食は 心と学びの 原動力」

沼ノ端中学校 三年二組 千葉 大志

「給食に 感謝の気持ち 九年分」





苦小牧市学校給食会

令和6年10月発行

第1学校給食共同調理場

〒053-0053 苦小牧市柳町1丁目3番5号 0144-57-5881

第2学校給食共同調理場

〒059-1262 苦小牧市美原町3丁目9番10号 0144-67-1815